

公益信託 世田谷まちづくりファンド

第20回助成事業 災害対策・復興まちづくり部門 審査講評

全体講評

【運営委員長 土肥真人】

こんにちは。運営委員長を務めております土肥です。

「災害対策・復興まちづくり部門」は、昨年の東日本大震災に世田谷のまちづくりは何かできることはないのだろうか、という素朴な思いから生まれました。募集の主旨にある「世田谷のまちづくりは、傷ついた仲間である北のまちに何かできることがないでしょうか。そして仲間のまちを助けることは自らのまちを更に豊かにすることにつながるのではないのでしょうか。」という思いです。私たち運営委員会は例年の2倍程度の会議を持ち、地震・津波・放射能に被災したまちへ様々な協力を行っている市民グループの方々にお話を伺い、部門の基本的な内容を詰めてゆきました。この検討過程で大きく問題となったのは次の2点です。

一点目は当ファンドの信託契約書にある「世田谷区における住民主体のまちづくりの促進を図るため」という信託設定の趣旨に関わるものでした。被災したまちの復興支援だけでは、世田谷の住民主体のまちづくりへの貢献にはならないのではないか、という問題です。運営委員会でも多くの議論がなされ、復興支援は必ず世田谷のまちの糧にもなるという確信と論理を固めてきました。この点を明確にするために、助成を受ける団体には、世田谷のまちづくりへのフィードバックを報告してもらおうということになりました。

もう一点は、予算の問題です。世田谷まちづくりファンドは、これまで19年間、毎年、信託・寄付される約500万円を助成の総額とすることを基本としてきました。（民間都市開発推進機構からの信託による「拠点部門」を除く。）現在の信託財産は一億四千万円程ありますが、こちらには手をつけないという不文律があったようです。しかしこの新部門は従来の世田谷のまちづくりへの助成分500万円とは別に創設すべき性格のもので、信託財産の一部を助成へ当てられないか、という検討を行いました。委託者のトラストまちづくり、受託者の三井住友信託銀行、両者にも運営委員会の議論の趣旨を理解していただき、初めて300万円の助成を信託財産から当てることになりました。

また、2012年度にすぐに助成金を使って活動が開始できるように、3月に公開審査会、それに先立つ広報・募集期間など、時間的にもかなりタイトなスケジュールの中で、「災害対策・復興まちづくり部門」の一件当りの助成限度額、助成金の用途制限、審査方法などを詰めることができたのは、運営委員の皆様をはじめ、ファンド関係者の多くの方々の協力があったからだと感謝しております。

さてこのように運営委員会としてはかなり頑張っ創設した新部門ですが、3件程度としていた助成件数に対し、10件もの応募がありました。世田谷のまちづくりの層の厚さと活動の幅の広さに改めて驚かされました。しかし同時に半数以上の団体に助成できないという、おそらくこれまでにない厳しい事態となりました。公開審査会でもご説明しましたが、審査会に先立つ運営委員会で、助成対象を最大4件にすることを決めましたが、それでも6グループは助成できないこととなります。世田谷のまちづくりのエネルギーの圧力、活動圧とも呼べるものを強く感じる事態でした。ぜひ来年もこの部門を継続し、さらに助成総額についても検討したいと思っています。

3月3日の公開審査会は、運営委員8名で審査いたしました。1団体8分発表6分質疑のプレゼンテーションの後、すぐに審査に入りました。投票の結果、〔芦花公園しあわせの野音の会〕〔福島子どもたちとともに・世田谷の会〕〔遊びとまち研究会〕〔こちカフェ隊〕が2012年度の「災害対策・復興まちづくり部門」の助成団体となることが決まりました。それぞれ、芦花公園と宮城県亘理郡亘理町の仮設住宅、世田谷と福島の高放射能の場所の子ども、世田谷の小中学校と仙台市の小学校、世田谷と宮城県東松山市東名、を世田谷のまちで磨いてきた得意技でつないでくれます。地震・津波・放射能の被災地、被災者の方々と強く繋がり、少しでも支え、共に歩めるような活動を、期待しています。活動報告会が、来年2013年3月2日に成城ホールで開催されます。助成を受けることになった4団体の方々の素晴らしい活動報告と、世田谷のまちを強く豊かにする提言を、楽しみにしています。

また助成対象団体とはならなかった皆様と、皆様が繋がろうとしたまちと人々には、心から申し訳なく思っております。この一年間の頭の下がるような地道な活動とそこから生まれた繋がるための素晴らしい提案が本当に多くあったのに、それを応援できなかったことは本当に残念で、また悔しくもありました。ぜひ活動を継続され、提案を実現されることをお願いしたいと思います。そして来年度、「災害対策・復興まちづくり部門」が継続された場合は、ぜひもう一度応募していただきたいと存じます。

この4月から世田谷まちづくりファンドは、設立20周年を迎えます。これまでのファンドの成果を振り返り、またこれからのファンドの意義を確かめる作業を、運営委員会で続けております。来年度は「10代まちづくり部門」も新しく創設しました。多くの年代の市民が、これまでの20年のようにこれからの数十年も、支えあい、喜び合い、共に生きるまちを作る、ファンドはその応援をしたいと願っています。

最後になりますが、運営をお手伝いいただいた、まちづくり広場と世田谷トラストまちづくりの皆様、また審査会で発表された市民の皆様、審査会を見に来場してくれた方々、皆さまのご協力に深く感謝いたします。

【運営委員 全体講評】

今回の世田谷まちづくりファンドへの申請、ありがとうございます。新しい部門でかつ周知の時間が短かったということもあり、どこまでの申請があるのか大変心配していましたが、ふたを開けてみると10グループもの申請があり、被災地支援に向けて、これだけ多くのみなさんが実際に行動していることを大変心強く感じました。

被災地支援にはいくつかの助成金が出ていることもあり、世田谷まちづくりファンドで助成する意味を考え、今まで蓄積してきた活動ノウハウや知見を生かせる世田谷らしい活動かどうか、長期的な視点に立った広がりが見られる（世田谷・被災地ともに）可能性があるかどうか、世田谷に今回の経験を提言として持ち帰ることができるかどうか、という三点に私は特に重きを置いて審査をしました。

実際、全体としても、今まで活動してきたノウハウや知見をきちんと生かした申請内容となっているグループが多く、当初300万円で3グループを想定していたところ、申請数が多く助成数を増やすために1グループあたりの助成金額を減額せざるを得なかったこと、そして助成から漏れてしまったグループが多く出てしまったことは大変心苦しいばかりでした。

一方、一年間の活動から世田谷への提言をどうつくっていくかについて具体的に触れられていたグループがあまりなかったのは残念でした。その点はぜひ、特に今回助成を受けたグループのみなさんには活動と並行して検討を深めていただけるようお願いしたいと思います。

今回の部門は、世田谷を基盤としながらも遠い被災地を復興支援し、かつ世田谷の防災まちづくりへの提言をしていただくという壮大な内容であり、今回チャレンジしていただいたグループのみなさんの活動はすべて尊重すべき活動と思っています。今回助成対象から漏れてしまったグループのみなさんにはご期待に添えず大変申し訳ありませんでしたが、活動を継続していただくことが何よりの被災地支援につながると思いますので、少しずつでも復興支援の想いを実現されることを願っています。また、今回助成を受けることができたグループのみなさんには、そうしたたくさんの人々の想いがこの助成金に詰まっていることを胸に活動していただき、来年の3月、成城ホールにて、一年間の活動を通じて得られた活動報告と、世田谷のまちをより豊かにする提言を期待しています。

【運営委員 全体講評】

全てのご提案が非常に有意義でアイデアに富み、審査をするのが正直難しかったです。皆様のプレゼンを伺い、学ぶことが気付かされることが多々ありました。

今回私が特に重視させて頂いたのが、既に現地とのネットワークをお持ちで現場の課題抽出が出来るかどうか、支援活動で終わらずに世田谷区へのフィードバックが期待できるかどうかを見させて頂きました。

助成を受けられる団体は、ぜひ、東北の方々が元気になるような活動を、そして、この活動を通

じて得た知見を世田谷へ還元していただきたいと思います。また、今回助成対象外となってしまった団体の皆様も、可能な範囲で活動を続けて頂きたいようお願い申し上げます。皆様が一番感じられていることだと思いますが、今なお、支援を必要としている方がいるという現実。私自身にも言い聞かせていますが、自分たちができることで支援を続けていけたらと思います。

【運営委員 全体講評】

申請団体の皆さま、お疲れさまでした。

私としては、今の時点で世田谷の市民団体が東日本に行く場合、単純なサポートより地元のエンパワメントにつながる活動であることが重要でないかと思い、そのような観点から審査しました。エンパワメントとは端的に言うと、世田谷の市民団体が始めた活動が、その団体が行かなくなっても東日本の地域の人たちで継続できるようキーマンやコアグループが育つように支援する、ということです。

私はコンサルタントとして各地のまちづくり団体に関わっていますが、「行かなくなっても継続できるように」ということはキーポイントだと思っています。それと今回の被災地を東京から支援することは似ているのではないのでしょうか。

ただ、被災地にはいろいろな地域・コミュニティがあるので、エンパワメント的な支援だけが必要ということではないので、そこは柔軟に考えました。

今回、助成を受けられた団体のご活躍を楽しみにしています。また、惜しくも助成を受けられなかった団体の思いが何らかの形で実現することを願っています。

【運営委員 全体講評】

世田谷で活動を続けてこられた皆さんが、東日本大震災の復興のために、すでにあの手この手で支援活動をしていらっしゃることに感銘を受けました。まちづくりの市民力はいろいろなことに生かせそうだと思いますし、また被災地の皆さんから多くを学ぶことが出来ると思っています。今回の助成は4団体に限られてしまいましたが、どの活動も今後末永く続いてほしいと思っています。

【運営委員 全体講評】

全体を通してどの団体を選ぶか難しく、ある団体に票を入れなかった明確な理由があるというよりも、限られた助成金額の中で、やむを得ず自身の評価軸を絞り込んで票を投じたというのが実態です。

私としては「震災から一年というこの時期に被災地が求めている活動だろうか」「その支援を経てその地区に継続的な変化をもたらすきっかけや仕組みづくりにつながるだろうか」「その結果、

世田谷のまちづくりにどんな刺激をもたらすだろうか」という点を自身で問いかけ、考えながら票を入れました。

もちろんどれも現段階では可能性にすぎず、本当に望んだ成果があるかどうかはわかりませんが、きっと何かを世田谷に持ち帰っていただけたらと思っています。